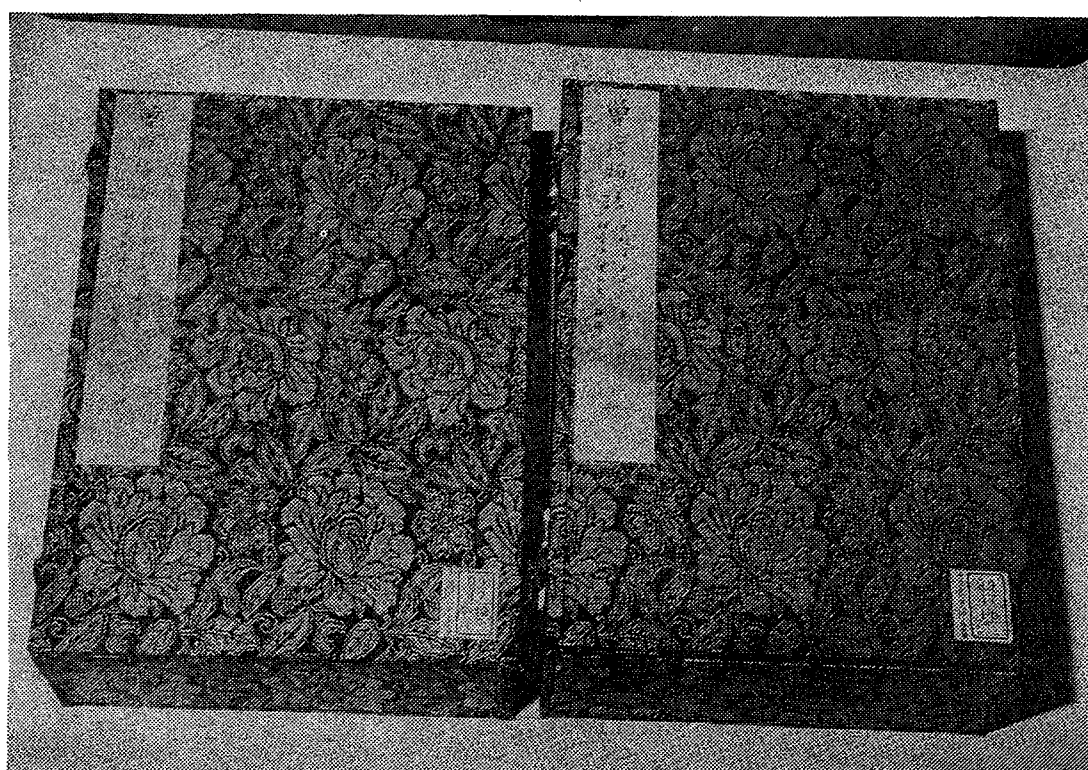


# 国文学研究資料館特別展示目録 六

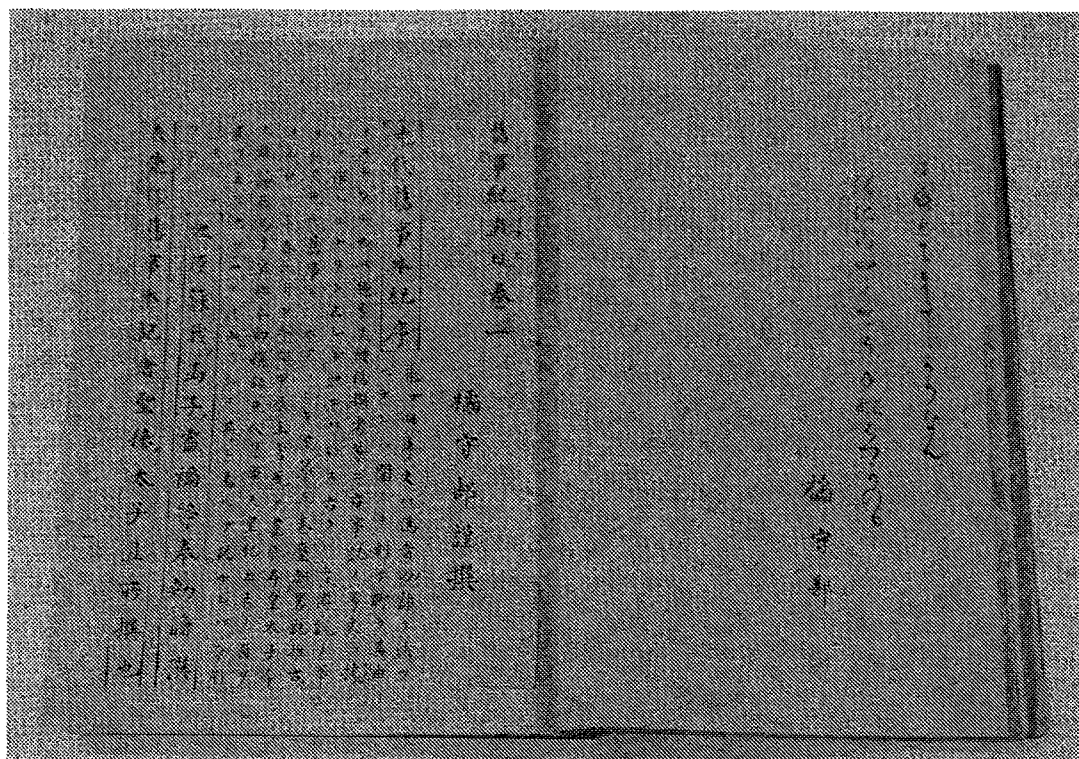
— 国学者自筆本と新収資料を中心として —



曾我物語 (P.1 1)



晃山扈從私記 (P. 30 34)



旧事記直日 (P. 31 36)

## は し が き

国文学研究資料館は本年で創立後十年目を迎えました。現在までに収集した資料はマイクロフィルム（古典籍）五万点、学術雑誌・紀要二千五百種、古典籍原本二万冊であり、さらに継続して収集しております。利用登録者数も七千人に達しました。

館の諸事業の中で古典籍原本の研究と普及を目的とする公開展示も回を重ねてまいりましたが、今回は館蔵の特別コレクションの中から国学者自筆本（主として国立教育研究所よりの移管本）、また比較的新しく当館の貴重書に指定された原本を展示しました。江戸時代に日本古典を研究し、わが国の上代の精神や生活を明らかにしようとした国学者の筆跡に直に触れて戴きたいと思います。また、特別展示の都度、新たに選定された貴重書を供覧しますので併せて御鑑賞下さい。

昭和五十六年十一月

国文学研究資料館参考室

## 凡 例

一、この目録は、新収資料等を中心とした前半19までと、国学者自筆本の後半部からなる。前半は、新たに（目録五以降）貴重書に指定されたもの（99番号）、国文学研究資料館報の新収資料紹介に掲載されたものを中心とした。後半は、基本的に書写年代による配列により、81番号（国立教育研究所より移管の特別コレクション）を中心とした。全四五点である。

一、目録の記載は次の順序によった。

書名、刊享年、大きさ（単位はcm―文中も同様―）、巻冊数、請求番号（貴重書↓99、特別コレクション↓81、一般書↓<sup>ナ</sup>4等）。解説は、初めに作品の分類（但、後半は著者名等）もしくは特徴等。次に表紙・題簽、装訂、料紙、丁数・行数・字詰め、印記、奥書・識語・刊記の類、伝本等、作品内容（後半部は著者の略解説も）、その他について記した。

一、解説は参考室（阿部）が担当した。諸先学の研究等に負う所が多く、本来一々明記すべきであるが省略させて戴いた。

一、末尾に、前回の目録五の補訂を入れた。諸賢のさらなる御教示をお願いする。

# 目次

はしがき	I		
凡例	II		
1. 曾我物語(組合絵入古活字)	1		
2. 曾我物語(寛文三版)	2		
3. 羅生門物語(絵巻)	3		
4. 狭衣(奈良絵本・下冊のみ)	4		
5. 連歌新式追加并新式今案等(写)	5		
6. 連歌新式追加并新式今案等(写)	5		
7. 三国物語(刊)	6		
8. 祇園物語(刊)	7		
9. 前太平記(黄表紙)	8		
10. 義経記 六段本(刊)	9		
11. 楠軍記 七之巻(刊)	11		
12. 隅田河梅若譚(刊)	11		
13. 中山文七当狂言絵尽し(刊)	12		
14. 雨夜三盃機嫌(刊)	13		
15. 朝風集(写)	14		
16. 鄙筑波・誹学校(写・刊)	14		
17. 倭玉篇(刊)	16		
18. 易林本節用集(刊)	17		
19. 弘惑袖中策(古活字)	18		
20. 書置之事(今井似閑)	18		
21. 和国魂(度会常彰)	19		
22. 日本国風(同)	20		
23. 脚結変例(富士谷成章)	21		
24. 本居宣長書簡	21		
25. 神祇秘抄・神皇系図・神皇実録(稲葉通邦・写)	22		
26. 古今要覧稿(屋代弘賢)	23		
27. 開国論(富士谷御杖)	24		
28. 脚結抄翼(同)	25		
29. 神典挙要(同)	26		
30. 詩経集註(鈴木眼の書入)	26		
31. 文政大嘗会次第(山川正宣)	27		

32	後輶軒小錄（新庄道雄）	27
33	加納諸平著書（伴林光平・写）	28
34	晃山扈從私記（成島司直）	30
35	歷朝神異例（橘守部）	30
36	旧事記直日（同）	31
37	〔雜著〕（五十嵐篤好）	32
38	名言結本末（同）	33
39	以呂波正義伝（同）	33
40	倭姫命世記考證（谷森善臣・写）	34
41	篤能玉籤（六人部是香）	35
42	直毘靈補注（鈴鹿通幸・写）	35
43	出雲国造神賀詞文義考（堀秀成）	36
44	角組葦（吉岡徳明）	37
45	賀茂真淵書簡	38
	特別展示目録五補訂	40

組合絵入古活字十二行本。藍色地に、雷格子に花模様空押しのある紙表紙。中央に「曾我物語一（十二）」と書く白紙題簽が一部残存する。袋綴。料紙は楮紙。各冊は卷一、七八丁（絵二六図）。卷二、五二丁（絵二六図）。卷三、四五丁（一六図、但、一八丁裏の絵と末尾の絵は同一）また、本冊は目録部を半丁破損し、その処理のために見返しは「そがへつれてかへりよろこびし事」の一行だけとなっている。卷四、五五丁（一七図）。卷五、六六丁（一八図）、但、前半部数十丁、左下部破損で不可読部分あり。卷六、五〇丁（一八図）、但、乱丁部分あり。卷七、四九丁（一五図）。卷八、五〇丁（一五図）。卷九、五二丁（二二図）。卷十、三五丁（一一図）。卷十一、三二丁（一一図）。卷十二、三三丁（一一図）、である。一面十二行、一行二一字の字詰である。字面の高さは二二・一センチ程。各冊一丁表に「青谿書屋」（大島雅太郎）の朱方印記、末尾に「月明荘」の印記がある。刊記の類はない。『古活字版の研究』によれば、曾我の古活字五種のうち「四、元和寛永中の刊行と認められる挿画刻本（每半葉十二行、每行約二十一字。字面の高さ約七寸三分）」である。（龍谷大学・藤井乙男博士四、六、八巻欠、九冊 高本文庫卷一、六、の二冊 大島雅太郎氏十二冊蔵）前記十二行本に比し、活字の長さがつまつてゐて書風潤達なる趣きが欠けてゐる。本書に就いて特に注意す可きは、其の挿画である。一面の挿画が数箇の集合によつて構成せられ、自由に組合せて幾回も襲用してゐる。従つて挿画は匡郭を以て括つて植版を行ひ、活字印本の挿画にふさわしい方法を用ひたものである。図中明らかに組合せたる空線を伺ふを得。また高本文庫蔵本と大島氏蔵本とを比するに其の本文は同版なるも、挿画のみ組合せを異にする部分あり。かかる部分的なる異版も存するを知る」と記される。一板整版の絵による伝本もある。また本書は、藍地に金糸で牡丹の入る金欄地の帙二帙に入り、完璧といつてよい程に補修されているが、その下帙に旧蔵者横山重氏による識語がある。「曾我物語古活字版、組合せ式挿繪二〇〇図（実は二〇一）、天和寛永中刊、天下二本、本書の他に龍谷大学に一本。（朱で一に訂さ



れ「龍谷」以下も朱で消す。これは龍谷大学蔵と伝えられたのは誤報と後に解つての訂正。挿画は一頁の図版に六個又は三(十と訂)個の刷り板を組合せてある。刊行者は、桧板を自由に組合せて、幾度も使用するつもりであったらう。かういう例は、文禄の「高野大師行状絵図」にあるが、古活字版には例がない。世界にも例がないといふ。がそれである。横山氏の識語、等にみられるように、絵、活字、ともに組合せての出版物は、世界にも例がないという貴重なものであり、しかも、現在は天理図書館等に蔵されている端本はあるものの、完本としては唯一のものである。

## 2 曾我物語(寛文三十一・一六六三年刊)縦二九・六×横一八・六 一二冊

藍色地に金泥で草花を描く紙表紙。左肩に布目地の白紙に草等を描き「曾我物語一(十二)」と記す題簽を貼る。

袋綴。料紙は楮紙。各冊は、卷一、五六丁(板木両面二、見開き九の一図入り)卷二、三七丁(板木両面六、見開き二の八図)、卷三、三〇丁(板木両面四、見開き一の五図)、卷四、三六丁(板木両面四、見開き二の六図)、卷五、四七丁(板木両面六、見開き二の八図)、卷六、三四丁(板木両面四、見開き二の六図)、卷七、三六丁(板木両面六、半面一の七図)、卷八、三七丁(板木両面三、見開き三の六図)、卷九、三五丁(板木両面五、見開き二の七図)、卷十、二四丁(板木両面三、見開き一の四図)、卷十一、二二丁(板木両面四図)、卷十二、二〇丁(板木両面三図)である。匡郭は単辺で内側二二・〇×一六・六、柱に「曾我物語 卷第一(十二)」(丁付、「又二十五」とか「三四」とかの記述もある)と記す。一面二三行、一行二四字程。卷三のみ朱円に「能州／佛照寺／正力」の印記がある。卷末には「能州鳳至郡三井 佛照寺」と記す。この冊のみ裏打ちがあり伝来を異にするが同版と認められる。刊記は「寛文癸卯仲夏吉辰／井上權之丞／山本長兵衛」とある。本刊本は、いわゆる流布本の典型であろうが、絵の入れ方において、巻の始めの方はかなり丹念に作られているようだが、巻十一以下が雑な処置になっている、等、書誌的に考える部分があるかもしれない。なお、古活字本から整版本への展開について、記前1の絵活字本に関してだ

が、国文学研究資料館報一七号に村上学教授の考察がある。次に引用する。

曾我物語の古活字版は、管見に触れたもの十一種（異植字版を含む）。最先出は十行本（日本古典文学大系底本）であるが、それに写本（穂久邇文庫本・龍門文庫本系）本文を以て増補せる十一行本イ種（龍門文庫に不完本あり）が他の古活字諸版の基となっている。この本は現存他版は介さず十一行本に繋るもので、この後出たる一枚板絵入十二行本（天理図書館に端本が存する）の本文から整版本最古版たる寛永四年刊整版本（無挿絵）が作られ、更にその後出本たる寛永頃刊無挿絵本に一枚板絵古活字本の絵の版木を流用して丹緑本が作られている。正保三年刊絵入本はその本の覆刻。その後刷丹緑本と絵抜後刷本が世上に流布している。手法の珍奇のみならず本文展開上も重要な本である。

3 羅生門物語（江戸中期写 絵巻）縦三〇・八×全長・上卷一三〇八・〇、同×下卷一三三三・〇 二卷 99 43

室町時代物語。紺地に鳳凰、牡丹唐草を配す金襴表紙。「羅生門物語上（下）」と記す鶯色に金箔をちらす紙題簽あり。料紙は金泥下絵の入る上質の鳥の子。上卷二九紙、下卷二七紙で各字面の高さ二七センチ。絵は各五図であり、第一図が二紙を継ぎ合わせた（七六・二センチ）他は各一紙（三八・五×五〇・三センチ）。本文は五一×五三センチ。下卷末尾に「市丞朝倉氏重賢書之」と同文と同筆で記す。猶、桐素箱入りであり、その箱書に「羅生門物語 弐卷」、蓋裏に「此羅生門巻物之筆者市丞朝倉重賢トアリ／田藤蔵スル古今和歌集ニ 同筆ニ見ユル 天文三年七月二十日功早桑門兼純トアリ／然レハ重賢ハ在俗ノ名ニテ兼純ハ老年入道ノ名歟／松尾村貴舟神社ノ画卷物モ此同筆ニ相違ナシ／弘化四年末三月／田林」とある。書写年代と兼純（猪苗代兼載の嗣子か。二四歳時には僧体であつた事が知られている、又廣幢氏との関係は考へうるが朝倉氏との件は一考の余地もない。）を結びつけるのも不可能。強いて考へても、松尾村（山形県東田川郡羽黒町松尾か）と、伊達植宗の和歌の師として仕えた兼純という地理上の近さを考

え得るだけの謬説である。要するに朝倉重賢なる人の伝記は未詳。絵は狩野派風。金泥を多用し、棚飾り用の豪華本であるが、人物と背景は画者を異にするなど、いわゆる工房的制作にかかるものであり、他本、例えば『図説日本の古典・御伽草子』（集英社版）所載の絵巻の絵に比し、人物の数など全体に簡略化された構図である。絵柄は、同本とも大通寺蔵奈良絵本とも位置・構図ともに相異なる。伝本は、東洋大学蔵・絵巻二軸、京都博物館蔵・絵巻二軸、等の絵巻、天理図書館蔵・写二巻、等の数本が知られている。本絵巻の本文は、他に翻刻された本文（東洋大学蔵絵巻『続お伽草子』岩波文庫―、大通寺蔵本―『中世物語集』一、龍谷大学刊―）と比較すると相互に誤脱がある。しかし諸本を通じて本文上の大差はない。猶上巻は「いへのてうほうなれともなんちにあつくるなりとてかのひけきりといふたちをも給はりける」で閉じる。内容は、渡辺綱が茨木童子の右腕を斬り落したが、老母に化けた童子が奪還しようとするが名剣髭切でその首を打落した、というもの。謡曲「羅生門」の影響作とされる。

#### 4 狭衣（江戸初期写 奈良絵横本）縦一七・〇×横二五・六 一冊

99 40

室町時代物語、下冊のみの零本。斜めに二分され、上方は黄土色、下方は青鼠色に銀箔散らしの紙表紙。題簽の類はない。袋綴。料紙は鳥の子。墨付一二丁。一面一五行、一行一五字程。絵は五図入る。巻末に「岡田真」の朱印、表紙見返しに「（？）源」の円墨印記がある。また旧蔵者のと思われる鉛筆書きが見返しにある。それは「絵 五枚 弘文 莊目録（昭29年6月）の181狭衣大将物語とあるものと同文なり、たゞ上、中を失ふのみ」であり、一丁表、巻頭にも「下巻 狭衣」と記す。本文は『室町時代物語現在本簡明目録』の区分する四国会写本 一帖入未刊二Vの系統に属するであろうことは（古典文庫『未刊中世小説』二）に翻刻された本文と対校するに誤写、誤脱などの少異はあるが、略一致することからも明らかである。『狭衣』は、『狭衣物語』の改作で、室町物語化されたものであり、いわゆる飛鳥井姫君の物語が自立していったものである。諸本のあり方も、より徹底した飛鳥井物語に転変してゆく様相

を示すものと考えてよからう。その中の一本である。

## 5 連歌新式追加并新式今案等

(文亀元—一五〇—一年奥書 写) 縦二八・九×横二〇・八

99 36

連歌の式目(吟詠のため守るべき禁制故実)書。薄青色地の紙表紙。題簽なし。列帖装。料紙は鳥の子。全三二丁、墨付二九丁。一面八行、一行二十〜三十字程。朱で句点、合点等が入る。二六丁表に「新式今案奥書……中略……享徳元年丑申十一月日関白御判(右に「後常恩寺殿」と注付があるが、常は成であり、一条兼良の奥書きと知れる。)」と記される。また三〇丁表に肖柏の奥書きがある。「應安以来新式之今案之追加条々并近代用捨篇目等依其端末学常迷商量而今彼是勒以為一冊但猶未一決之事或暫漏之或先載之以侍後君子志同者從之亦宜乎 文亀辛酉林鐘上澣 夢庵居士肖柏(丸形朱印あるも判読不可)」。なお、一丁裏、左肩に「牡丹花肖柏連哥新式(養心の墨印)」その裏に「一冊己酉五(神田道僖の朱印)」と記す極札が貼られている。本書は応安新式(二条良基(元応二—一三二〇—年)嘉慶二—一三八八—年)の制定、後に追加に、さらに一条兼良(応永九—一四〇二—年)文明一三—一四八一—年)が新式を加え、後に肖柏(嘉吉三—一四四三—年)大永七—一五二七—年)が内容を追加し、整理改修して成立したものだといわれている。本写本は、奥書と本文が別筆と思われ、室町末頃の写かとは思われるが、肖柏筆の可能性は薄い。(目録五より転載)

## 6 連歌新式追加并新式今案等

(永禄元—一五五八—年写) 縦二四・〇×横一六・五

99 42

連歌の式目書。鶯緑地に金箔を散らし、同じく金泥で草木等を描く紙表紙。但、これは後補になる。題簽なし。袋綴。料紙は薄葉で、薄手の楮紙で裏打ちがなされている。墨付二四丁。一面七行、一行に二行の割注あり。一行は一二字から二〇字程である。奥書は、99 36本にみられるものに続き「永禄元年臘月上浣 桑門雪江染筆」と記されている。書写者は、井上宗雄氏の『中世歌壇史研究 室町後期』によれば「土州一条末葉桑門雪江尊俊」である可能性が

高いと判断されるが、細部は不分明である。同著を参照されたい。内容は一丁表から「連歌新式追加并今案等」は、

韵字事、輪廻事、遠輪廻事、本歌事、雜物牒用事、と続く、そして「連歌初学抄」二〇行、享徳元年十一月の奥書五行、「和漢篇」一二行が付いて前述の奥書がある。この形態は、9936本とも同一のものである。

#### 7 三国物語（寛文七—一六六七年刊）縦二四・七×横一八・三 五冊

ナ 4  
60

仮名草子。葡萄染地の紙表紙。左肩に「三国物語一（く五）」の題簽を貼る。五卷五冊。袋綴。料紙は楮紙。各冊は、一、三八丁（絵六図）、二、三三丁（六図）、三、二八丁（五図）、四、二七丁（五図）、五、三七丁（七図）であり、各一面十三行、二五字程。四周单边で内側、二〇・九×一六・〇。柱刻は「三国卷一（く五）一（二十七）」とある。

刊記は五卷末尾に「吉野屋惣兵衛／寛文七丁<sup>末</sup> 初夏吉日 開板」とある。扉裏に「アカキ」の小朱長方印、五卷末に同上、「よこ山」の朱長方印、等の印記がある。伝本が少なく、山崎麓『日本小説書目年表』（昭4）は「散逸物語目録（み部）」に登載。『国書総目録』はそれをうけて「みくにものがたり」とし、西尾市立図書館岩瀬文庫のみを所蔵先と記している。しかし、延宝三年刊の『新增書籍目録』、天和元年刊『書籍目録大全』は「さ假名」（仮名和書の「さ」の部）に入れているので、名称は「さんごくものがたり」でよからう。ただし、元禄十二年刊『新版増補書籍目録』は三冊（広島大学にこの形の版あり）と伝えるが、他は、大概「七冊」と記載している。本刊本、そして岩瀬文庫本も五冊本であるから、この部分に疑いが残る。伝本は、本刊本と岩瀬本は同版で、他に、無刊記の三冊本が広島大学にある。この内題は「天竺物語」（柱刻「三国一」、一一話）、「大唐物語」（「三国二」、一一話）、「我朝物語」（「三国三」、一一話）となっており、五冊本に比して説話本文は同文ながら、絵柄が異なる形であり、あるいは、五冊本の抜出改編本でもあろうか。内容は、三国の説話を、我朝・唐・天竺の順に配列し、この単位の繰り返しである。『三国伝記』とは逆順。話数は、卷一から、三〇話、二七話、二四話、二七話、三〇話である。卷三、二二

話の『神道集』にみられる竈神の本縁譚や、卷一、二話の絵姿女房など興趣ある説話を始め、『沙石集』『撰集抄』『宝物集』『三国伝記』といった中世説話集や、『ひそめ草』『智恵鑑』『列女伝』等の仮名草子類との同話が多い。

8 祇園物語（寛永一六二四一六四四年間頃の刊）縦二七・〇×横一八・八 二冊

ナ 46

仮名草子。柿色地の紙表紙。題簽は欠く。袋綴。料紙は楮紙。上下とも、四八丁。一面十一行、二六字程。無辺無界で挿画はない。柱刻は「祇上（下） 一（一四十八）」とある。卷末に「をばま」の朱円崩し、等の印記がある。なお、折り目から剝れた部分が多いが、上冊の部分で、改装の際にでもあらうが、一丁表の次に二丁表、一丁裏、二丁裏の如くに綴じ誤まりがある。刊記の類はない。伝本は知られる限り版本で、国会図書館等、一八本が『国書総目録』によれば知られている。この作品は『延宝三年刊書籍目録』に「二祇園物語／清水修行／清水物語返答」とみえ、清水修行なる人の作とされる。猶、『近世文学未刊本叢書 仮名草子篇一』（昭和二二年・天理図書館編）に翻刻され、中村幸彦、木村三四吾の両氏による解題が付されている。同解題は、作者名は、清水寺の執行にある人の意とし、内容等に関しては「内容の仏道擁護論や、生硬な仏教専門語を駆使するあたり、釈氏の筆になったのは確実である（中略）清水物語返答とあるのは、本書が前掲八書籍目録は、ほとんど、本書の前が清水物語―引用者注／清水物語の各条をあげて、これを批評し、大体その論旨に於いては賛成する所が多いが、清水が儒の立場から仏を排斥する点については、強く弁護し（中略）儒を反撃する所さへあるを指している。よって本書の成立は、清水物語刊行の寛永年間を下るまいと推量されて居る。なほこの書にも初版利用の再刻本がある。右二書／『清水物語』と本書―引用者注／は、ともに高上の説を俗耳に入りやすからせようと、まゝ叙景をさしはさみ、叙事を加へて、小説の体を借る処、教訓的仮名草子の先蹤をなしたものである。」となる。本刊本は比較的に刷りのよい本であり初刊の刷りと考えてよからう。

9 前太平記（刊年不明）縦一七・八×横二二・八 九冊

ナ 4  
265

袋綴。楮紙。黄表紙。黄色地の紙表紙に絵簽題を貼る。これは、『前太平記 新版』の卷廿二から卷三十までにあたる九冊であり、廿二は「幼君弓勢績 下」、廿三・廿四は「遺鹿確執鋌 上・中・下」、廿六、廿七は「怪力鳴咩闔 上・下」、廿八・三十は「葱前九年 上・中・下」からなっており、黄表紙としては、右の四作品として区分して扱うのが妥当と考えられているので、各作品ごとに録していくことにするが、後述するように柱刻からは、「ゆんせいのいさほし」の冒頭一冊を欠く四冊の区分と、「しのぶずり前九年」の完五冊に区分も可能であろう。

幼君弓勢績（ようくんゆんせいのいさほし）

ナ 4  
265 1

絵題簽は「前太平記廿二・新版（横書き）」とあり、次に角書き二行、各ルビ「酒顚／鬼同」そして「幼君弓勢績 下」とある。ついで「西宮（横書き）④」とある。これは言うまでもなく出版書肆を示す記号で、黄表紙に関して知られている所では、安永四（一七七五）年『二面勢』から文化三（一八〇六）年『敵討安達太郎山』を出版している江戸（本材木町一丁目）の西宮新六（翫月堂・春松軒とも）を示すもの。柱刻は「前廿二ゆんせいのいさほし」とあり、その下に丁付「六（一十）」と記す。五丁。

遺鹿確執鋌（しかにのこるくわくしつのやのね）

ナ 4  
265 2~4

絵題簽は「前太平記廿二（廿三・廿四）新版（横書き）」とあり、次に角書き二行、各ルビ「叛逆／忠常」そして「遺鹿確執鋌 上（中・下）」とある。ついで「西宮（横書き）④」。柱刻は「前廿三（廿四・廿五）ゆんせいのいさほし」とあり、その下に丁付、上冊は「十一（一十五）」、中冊は「十六（一二十）」、下冊「二十一（一二十五）」の各五丁である。

怪力鳴咩闔（くわいりやくあうんのとびら）

ナ 4  
265 5~6

絵題簽は「前太平記廿六（廿七）・新版（横書き）」とあり、次に角書き二行、各ルビ「則經／景通」そして「怪力鳴咩闌 上（下）」とある。ついで「西宮（横書き）①」。柱刻は「前廿六（廿七）しのぶずり前九年」とあり、その下に丁付、上冊は「一（〇五）」、下冊「六（〇十）」の各五丁である。

#### 葱摺前九年（しのぶずりぜんくねん）

ナ 4  
265  
7～9

絵題簽は「前太平記廿八（廿九・三十）・新版（横書き）」とあり、次に角書き二行、各ルビ「義家／勇戦」そして「葱摺前九年 上（中・下）」とある。ついで「西宮（横書き）①」。柱刻は「前廿八（廿九・三十）しのぶずり前九年」とあり、その下に丁付、上冊は「十一（〇十五）」、中冊「十六（〇二十）」、下冊が「二一（〇二五）」の各五丁である。また、三十の末尾に絵に「北尾政美画」との記載があり、区切りを示すものとも考えられる。猶、北尾政美（明和元―一七六四年―文政七―一八二四年）は、江戸末期の浮世絵師で、黄表紙にも「氣象天業」の戯作名を持つ。安永年間、十余歳頃から作画生活に入り、安永九（一七八九）年から寛政八（一七九六）年まで、百六十余种の黄表紙に挿画を書いたといわれる人。本書は、この種のものに整理の余地が残るせいか『国書総目録』未載である。また絵題簽、本文も刷りがよく、このような黄表紙として、完本でないにしても原初の形態をとどめているものは珍らしいと考えられる。

#### 10 義経記 六段本（元禄二―一六八九―年刊）縦二二・四×横一五・六 二冊（六之巻・七之巻）

99  
41

土佐浄瑠璃正本。茶色地の紙表紙。左肩に紙題簽を貼る。題簽は、左右に三段づつ六段の段名を記し、中央上部は横に「新／六日（七日）／板」と入り、中央は『義経記（右傍に「ぎけいき」のルビ）』、左側に「土佐少掾橘正勝正本也」とあり、中央下部に「大傳馬／▲屋／三町目」と鱗形屋の商標がある。猶、段名は、判読の困難な部分、破損等があるが、六之巻は、「一、判官都出大津二なさけ 二、みくちのせき―以下中途読めず。下部は（以下二行書き、右





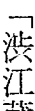

側はに□□□□□□□□□□、左側「□□□□□ね弁慶ちやうちやく」とあり、四、おいさがしの事 五、かめわり山にて御さんの事 六、ひて平さいこ、七之巻は、「一、□□奥州くたり□? いけき 二、くまのゝ本地御すいでん 三、すゞきかめいゆんぜい 四、すゞきかめいたち死の事 五、よしつねさいご（以下二行で右は「弁慶□□□□」、左「立わうしう」）六、（以下二行で右は「判官くたく□□」、左「くみじやうの事」）」と記されている。巻首は「義経記六之巻（七之巻）初段（く六たんめ）」とあり、柱刻は「義六ノ 一（く十六）」と記す。袋綴。料紙は楮紙。「六之巻」は十五丁、「七之巻」は十七丁、各冊、本文の匡郭内一七・〇×一一・三。一面十七行、四三字程。絵は、六之巻に六図、七之巻は五図、各々見開きである。刊記は、六之巻「右此本者大夫直傳之以正本一字一点あやまりなく写之令板行者也大傳馬三町目 元禄二歳正月吉日うろこかたや新板」、七之巻は「右此本者世間ニ雖有数多殊之外落字誤有之故今又太夫直傳之以正本写之令板行者也 元禄二歳年正月吉日うろこかたや新板」とある。節譜はなく、所々に句切り点がある。本刊本は、保存がよく、刷りのよさ、題簽からも初印本と認められ、『土佐浄瑠璃正本集』第二の解題によれば、「初印本と思われるものに、東京大学附属図書館蔵本（霞亭文庫旧蔵本、初巻く七之巻）、国立国会図書館蔵本（初巻く七之巻）、大東急記念文庫蔵本（初巻）、信多純一氏蔵本（三之巻・六之巻）などがある。」とのことである。土佐浄瑠璃は、その流祖土佐少掾橘正勝の受領号によるのだが、江戸の浄瑠璃として、最も有名な流派の一つであるにも拘らず、その伝系はよく分っていない。江戸時代に入り、浄瑠璃は、始祖的位置にある薩摩浄雲に次いで、金平浄瑠璃の桜井丹波掾が剛勇の曲節で一時を企した外に、多くの流派が行われた中で、最後に江戸で奮闘を試みたのが土佐浄瑠璃であった。よって江戸の最後の浄瑠璃で曲節に詞章に大成者としての功が多く、江戸歌舞伎、そして上方浄瑠璃への題材の提供も少なくない。猶、義経記は、もちろん他の古浄瑠璃にもあり、井上大和掾の正本「伏見常盤」（万治四年）は、「義経記」の初巻等で知られ、詞章は土佐浄瑠璃とほとんど一致するという。『古浄瑠璃正本集

第三解題』参照。

11 楠軍記 七之卷（元禄九—一六九六—年刊）縦二・九×一五・六

浄瑠璃正本。茶色の紙表紙。左肩に、四周双辺に「入画 太平記 七之巻」と記す白紙題簽を貼る。巻首題は「楠軍記 七之巻」とあり、柱刻は「楠七之巻 初二（〃四五〃十四）」と記す。袋綴。料紙は楮紙。丁数は十二丁。一丁を（初二）とし、三丁を（四五）としているので、丁付は十四丁までとなっている。本文の匡廓内一七・〇×一一・九。一面十七行、四二字程。絵（杉村治兵衛画）は見開きが四図入る。刊記は「元禄九年子正月吉日 大傳馬三町目うろこかたや孫三良新版」とある。節譜、句切りともになし。表紙に「太平記」とあるのは、「楠軍記」の改題とみられている。詳細は『古浄瑠璃正本集第七解題』によられたいが、伝本は、他には西尾市立図書館・岩瀬文庫の蔵書（同前掲書に翻刻）が知られるだけである。

12 隅田河梅若譚（享保十一一七二五—年刊）縦一九・一×横二三・〇

淨瑠璃正本。薄茶地の紙表紙。左肩に「隅田河梅若譚／享保十乙巳年正月板（右脇）／画工近藤清春筆（左脇）」と記す薄青地に唐草紋様を金で刷る題簽を貼る。袋綴で裏打ちが施され改装。料紙は楮紙。全十丁、絵見開き三図。一面十六行、三八字程。四周单边（一六・八×一一・八）で「川 一（く十）」の柱刻がある。表紙裏に瓢箪に「花明」の文字の入る朱印記等、一丁表には、左向きのダルマ、「」、、「」、「」の朱印記がある。刊記は巻末に「右此正本太夫直之写、以之令板行者也／享保十乙巳年正月吉日 通油町藤田開板」とある。六段からなるもので、『国書総目録』には立項されていない。ただし『歌舞伎細見』に記す「隅田川梅若物語」と深い関わりがあるかもしれない。また、国書の「角田川」の条に「享保一〇版―大東急（近藤清春画）」とある大東急記念文庫蔵の六段本（絵入、享保十年刊）は、未調査だが、本書と同一の可能性がある。題材は言うまでもなく謡曲『隅田川』の流

れにある話であって、梅柳山木母寺縁起にその典型をみる。本書は「つく／＼おもんみるに本てう七十三世ほり川の院の御宇かとよ都北白河吉田の少将これさたとてかうけ一人おはします」と始まり、この設定は、仮名草子の『角田川物語』、山本土佐掾正本「隅田川」等と同一であり、近松の『雙生隅田川』とは別系といえそうである。猶、画の近藤清春（年没年未詳）は、俗称を助五郎、江戸中期の浮世絵師で、鳥居流の画風に近い。文才もあり作を兼ねたものもあり赤小本に作が多い。

### 13 中山文七当狂言絵尽し（刊年不明）縦二一・〇×横一四・九

ナ 7  
1

歌舞伎。薄青色地に卍繫（紗綾形）の空押しのある紙表紙。左肩に白紙題簽「中山文七当狂言繪盡し（をばまの朱円崩し印記）全」とある。表紙、題簽とも後補。一丁表が本来の表紙かと思われる。これは、四周双辺（一七・七×二三・五）で角を崩す。いわゆる「かっぱ摺絵表紙」で辺外上段に横に「十二月狂哥入」と入り、辺内左上部に五三桐紋、その下に「中山文七」と左下りの横書き、同じく「當／狂言／繪盡 全」と入る。絵は赤・黄の彩色が施されて、米俵に大黒天、下に小判を持つ白鼠を画く。全七丁。柱刻があり「文五（九）」と記す。題簽ならびに巻末に「をばま」の朱印記がある。刊記は「大坂天神橋松江町東八入／大和屋清蔵板」とある。内容は、例えば「正月／立春ニ寄／横山太郎／小栗判官 三段目」「横山の霞の幕を／引明て／出る／笑顔も／大郎月とや」との記載に役者の絵が入る。すなわち、月（正月／十二月）、寄せる題（初午、螢、等）、配役名、出し物の場合（演目）と絵、それに合わせた狂歌が一組となっている。ちなみに、演目は二月「千本櫻 四段目」、三月「乗掛合羽 敵討之段」、四月「伊豆院宣 四段目」、五月「腰越状 三段目」、六月「浪花かゝみ 通具屋之段」、七月「金屋金子郎／がくのれさん（角書き） 南詠戀拔書 中之巻」、八月「双蝶々 八情の段」、九月「芦屋道満 四段目」、十月「在原系圖 四段目」、十一月「磯馴太 三段目」、十二月「近江源氏 九段目」となっている。この中山文七（享保一七一―一七三一年）文化十一

八一三〇年）が初代であることは絵様から推定できる。中山文七は、京阪の歌舞伎俳優。初代中山新九郎の養子中山与三郎が、寛延元年十一月改名したのに始まり、幕末、明治初期の中山甚吉の文七まで四代に至る。初代最も著はれ、二代これにつぐ。初代は晩年、京都黒谷の真如堂門前に僧庵をしつらへ、剃髪して浄光法師と号し、念仏三昧の傍ら狂歌、書道などにその余生をあてた。男大柄で色白・和か味に富み愁事と可笑味と見得とに妙であった。

14 雨夜三盃機嫌（元禄六一一六九三年序刊）縦二二・三×横一五・八 三卷二冊

ヤ 7  
10

役者評判記。藍色地の紙表紙。左肩に四周双边に「京都／江戸／大坂／（以上三行角書き）雨夜三はいきけん 下」と刷題簽を貼る。上冊は後付の藍色地の紙に墨書。袋綴。料紙は楮紙。上冊、二六丁、下冊、二八丁。匡郭は四周单边で内側一七・七×一三・二。上冊は、序につづき、水木龍之介以下四八名の女形の絵姿を下段に入れ、上段三・七程に十一行の「評曰」などの和文の評が入り、次段に、役者の紋所、名前が入り、次いで、七絶風の狂詩じたてで役者名を四文に改変（例。水木龍之介↓水木龍様）して折り込んである。下冊は、一面十一行、二九字程で、「雨夜三盃機嫌卷之中 口状」が入る、この部分丁付は「下ノ一」からとなっている。ついで、二段組みで、「坂田藤十郎」から「川嶋彦左衛門」まで三六人の役者名を掲げ、漢文で寸評を加える。これには絵が入らない。「雨夜三盃機嫌卷下」は、丁付「下ノ九」以下であり、「顔見吟」等の狂詩や、狂文仕立ての文章が入り、最後に跋文が二丁入る。序の末尾に「于時元禄六若水日漫筆於賀茂川流／木笛菴 瘦牛（木笛の陰刻）」との識語がある。なお、漢字には、ほぼルビが付されている。『国書総目録』によれば、国会図書館を始め七ヶ所の蔵を認める。猶『歌舞伎評判記集成』第一巻にも翻刻された。

15 朝風集（自筆 写）縦二七・一×横一八・四

ナ 2  
176

和歌集。紙の粉色地に横刷毛目の紙表紙。左肩に同系の紙を貼り「朝風集」と墨書。右肩には印刷した紙片「第一

と第二のゆひもてひらくへし其よみたるさかひにをりめつけ又爪しるしする事なかれ」を貼る。袋綴。料紙は楮紙。墨付二三丁半。一面十行、一行二六字程で詞書等は四字程下げる。一首一行書き。奥書の類はない。一丁表に「瀧川氏圖書記」、「誠齋」の朱方印記、「朝風」の菱形朱印記等がある。巻頭に「哀傷歌」とあり、妻・子・孫などを失った折りの哀傷歌がほとんどであり、病人の傍にあつて看病しながら平癒を願う歌、神詣りの歌、そして死、野辺の送り、後日在りし日の事共を思つての歌など二八九首よりなる。朝風（明和二一―一七六五―年〜天保五―一八三四―年）は、江戸の国学者、宣長門下で、「柳営年中行事大成」「近代名家著述目録」等の編著を残し、伴信友の「本居宣長年譜」の草稿作成者とも伝えられる。この歌集の巻頭に鈴屋大人の死を傷める歌一三首を載せたあたり、宣長への畏敬の念が感ぜられる。本書が自筆であることは、内閣文庫蔵の「朝風意林」残存六〇冊中の自筆署名に徴して明らかである。また本書が日頃書き留めた歌稿からの抜き書き（自撰編）であるのは「そのほどこさく思ひつづける難きのおほよそ」「年明て後よめる歌の中に」と後日纏めの時点で書いた詞書きが存することと知れる。哀傷のこの部分以外、朝風の歌稿は知られていない。

16 鄙筑波（影写） 誹学校（刊年不明）縦二二・九×横一六・四

俳書。両書は合綴されており、その表紙は無地の紙表紙。左肩部に「。鄙筑波 享保二十年／。誹学校 寛保二年」その下に両書名をくくる印があり「初代／祇徳」と打付書きされている。今、一応両書を区分して記載する。

(1) 鄙筑波——仮表紙の次に遊紙一丁を置いて次に本文と同紙で左肩、四周双边「ひなつくは 古学全」とあり、右肩に「原本タテ七寸八分ヨコ五寸一分 水口青次郎（水口の三文判）」と打付書。袋綴。料紙は三桎。墨付一八丁。一面十行、序は十二字詰。本文は一句の下に吟者名で一行をなす。丁付は一（〜十八）。これは享保二十年の刊本の新写であろう。序の末尾は「享保歳次乙卯重陽日／瀾雪道人岩岑水題（印記）」またこの部分印で「享保

二十乙卯年」また「岑水」に関わる朱の抜書三ヶ条あり。また跋文（十六丁表く十八丁裏）の末尾に「享保二十歳十一月 啄木彫」とありついで「水口青次郎（水口の三文判）」と記す。本文は三丁表から「ひなつくは」に続いて汶光、九皐、祇徳の三吟歌仙（発句は「名月や空へも岑のつくは山」）。ついで為邦、汶光、魚貫、祇明、祇徳、空翠の六吟歌仙（発句「句もなくは返るな雪の筑波山」）。その後「発句之部」があり、たぶん祇徳の一門の発句が収められる。末尾に跋文。

(2) 誹学校——藍色地布目地の紙表紙。題簽なし。袋綴（裏打ちあり）。料紙は楮紙。本文十二丁。一面八行、一行一五字程。本文は一句の下に吟者名を入れ一行とする。巻頭・巻末に「水口素風（「素風」の文字の入る鼎型朱印記）」と旧所蔵者と思しい記載がある。本資料は、寛保二年に門人古学庵鈍牛（八王子住）が相模方面に遊杖して、厚木に風月庵を結んだ折の記念集で、五条目の教誡（元文五年祇徳在刊）と「風月より（後述する）」の発句および「色欲教誡の唱句／鶯やあまり愛してこぼれ梅／自在庵／祇徳」を巻頭に配して、遊俳の堅持すべき姿勢を説いている。なお、「鶯や」の句については海寿『歌俳百人撰』に逸話がある。そして、以下八丁余にわたって相模方面の門人の春興句を収める。「四時観」派の研究には恰好の資料である。洒落・比喻の風体、あるいは化鳥風といわれる奇警・謎の俳諧が風靡していた江戸の俳壇も、其角、沾徳を失って漸く変風の時を迎える。法師風の作者祇空を戴く『五色墨』（享保十六年刊）と、『四時観』（同十八年刊）のグループがその推進者であった。前者は美濃派・伊勢派の田舎蕉門に接近して革新を図ったのに対し、後者は思想界の動向を反映させることによって点取俳諧の旧弊を除こうとした。『四時観』の領袖祇徳（前号水光）は、享保二十年『誹諧句選』を刊行、「誹風世々にかはるといへども、透逸・堪能の句に至りては、新古更になし」と喝破、「誹諧も古文字を用べし」と徂徠学をそのまま導入し、古学の額を掲げ、以後一派の撰集には必ず「古学」の二字を外・内題に付す。

17 倭玉篇（慶長十八—一六三一年刊）縦二六・七×横一九・九 三冊

99 45

16

部首分類体字形引きの漢和字書。藍色地に雷格子の空押しのある紙表紙。左肩に白紙に「大和玉篇上（中・下）」と記す題簽を貼り、又、上・下冊には上段に部首分類細目を記す白紙を貼る。袋綴。料紙は楮紙。上冊は目録二丁、本文八四丁。中冊は同三丁、同八〇丁。下冊は同三丁、同七一丁。各冊は目録五段、本文四段七行に組まれ、有界四周双辺（匡郭内、縦二一・〇×横一七・六）である。柱刻は「和玉篇卷上（中・下）一（八十四）」とあり、内題、尾題は、「倭玉篇」と記す。各冊一丁表に「奥野方冊朴塾之藏書」の朱方印記がある。刊記は「慶長癸丑仲冬日開板之」とあり、同十八年の刊である。なお、卷上第二四丁は後刷にて補、卷中七九、八〇丁は古き補抄である。本刊本は比較的に刷りもよく保存も良好である。成立は室町時代の前期と考えられ、伝本は、焼失した長享三—一四八九—年本に次ぎ、東北大学図書館蔵の延徳三—一四九一年の識語があるものが現存最古と認められ、慶長以前だけでも写本三〇種以上、版本は一〇種に及ぶという。版本の知られるものは慶長古活字版をはじめ、六年、一〇年、一五年、一八年などがある。内容は、部首分類体で字形引きの漢和字書であるが、写本・版本の数も多く、表記形式も一定ではない、例えば部首数は最少百部から五百二部までである。多くの使用がなされたために、それぞれの改補を生んだものでもあろう。また各冊の見返しに旧蔵者のと思われる墨書がある。それは上冊に「倭玉篇 卷上 長生殿 今野豊吉 倭玉篇 卷上終 長生殿裏 春秋富 不老門前 日月遲 文化四年 今野氏」「染屋今野豊吉（横書）」とある。中冊「花さかふ嵐の庭の 花さかふ嵐の庭の雪おりて ふり行物は我身り鳧」裏「君か代は 千世にやちよに さくれ石の いはほとなりて 苔のむすまで」。下冊裏「鳶飛魚躍淵 心たにまとの道にかなひなは いのらすとても神や守らん 鳶飛<sup>ヒ</sup>戻<sup>テ</sup>天魚躍淵 みな人はかくへき物をかゝすして 事はかくなりはちを書なり」である。手習い書きでもあろうが、文化四年、染屋 今野豊吉なる人の当代的なものでもあろうが、文字への

感覚がうかがえる。

18 易林本節用集（慶長二一一五九七年跋 刊）縦二八・九×横二一・〇

99 44

中世後期の語彙の漢字表記と読み方を示した辞書。藍色地に唐草つなぎ格子に花を配す空押しのある紙表紙。題簽は欠く。袋綴。料紙は楮紙。本来、上冊六八丁、下冊七二丁の二冊本だが本刊本は合冊されている。巻末付録の特別な場合を除き、一面七行、割注・付訓があり、字詰は一行一五字程である。四周单边で匡郭、縦二五・三×横一八・二であり柱部に「節用集 上（下）一（く七十二）」と記す。イロハ順で、それぞれを乾坤・神祇・名字・器財、等の部門に分け、標目は陰刻である。一丁表に「所石山蔵」の墨長方印、円に山形を配し「最上 石山 行澤」の墨印がある。末尾には「洛陽七条寺内平井勝左衛門休與開板」と陰刻の刊記があり、つづいて「有客携三鉅卷曰此節用集十字九皆質也正諸於韻會禮部韻諸則命工刻梓焉如愚夫弄（慶章）何辨三字畫之誤哉惟取定家卿假名遣二分書伊為越於江惠之六隔段以返之云岢慶長二丁西易林誌」と記す跋がある。これは定家假名遣によつての統一を言うのであって、易林本の特徴となっている。また、跋からも伺えるように、これは刊本として流布し、何種かの異版が知られるが、本刊本は、陰刻刊記（平井版と通称）を有し、原刻と認められるもので摺刷精功なものの一本といえるものである。「節用」とは、折節要るの意とされ、日常用いるように語彙を集めた辞書の通称を『節用集』と呼んでいるとしてよく、他の名称を持つものもこの名に包括されている。諸本は大きく慶長以前の古本と元和・寛永以降のものに大別され、古本は伊勢本系、印度本系、乾本系に区別され、易林本は、その伊勢本系の増補本類のうちの『辞林枝葉』に最も近いと位置づけられている。

19 弘惑袖中策（古活字版）縦二六・〇×横一九・〇 二冊

4 25

天台宗、仏書。紺色地に紗綾形空押しのある紙表紙。題簽なし。袋綴。料紙は楮紙。上冊一八丁、下冊二五丁。一



面十行、二〇字。本文四周单边（二三・四×一五・四）無界。版心幅広く白口花魚尾に「弘惑上（下）△丁付▽」の柱刻がある。各冊、巻頭一丁は目録。「寶玲文庫」の墨印、「島田藏書」等の朱方印が一丁表に、巻末に「月明荘」の朱印記がある。刊記は、下巻末に「於江戸梓刊」とある。また上冊末尾に識語が墨書されており「点本云／康正元（一四五五）年乙亥九月廿日於台密本院西谷佛乘房南面窓二（下部裁断）應實俊師法印権大僧都嚴命雖惡筆染寫（下部裁断）／右筆（同上）」と記されている。猶、本刊本は、かなり早い時期の改装になり、裏打ちを施す他、天地を相当裁ち切っている。また全巻にわたって多くの朱墨書き入れ、校合が見られ、前述の識語により、永禄二―五五九一年定珍書写本（弘惑袖中策の最古伝本で叡山文庫現蔵）の天正五年豪春転写本に依拠したものと知れる。さらに、数ヶ所にわたる誤植訂正が見られ（上巻目録「第八下能脱上」の「能」字は「聴」と誤植してその箇所を白く塗抹し、上から正しい字を印しているし、また下巻には同様に白塗抹を施しながらも活字でなく筆で訂正した例あり）書誌学的に興味深い資料である。伝本に関しては前述の写本の他、かなりの版本（元和古活字、慶安五、寛文元、宝永七、等）が知られるが、江戸版の古活字（元和六・七年頃の刊行と推定）は、他に大東急記念文庫、日光山天海蔵の各一部を数えるのみである。これは近世初頭の江戸における古活字出版事業を知る数少ない例（そのほとんどは天台宗関係で、版式等は叡山版と同じ）を示すものでもあり、印行の書籍自体が遺存稀だからでもある。本書は伝教大師最澄の撰とされ、諸々の疑惑迷妄を払って天台一乗の教えを究明宣揚するもの。弘仁九―八一八一年以降の成立かとされる。

20 書置之事（自筆 写）縦二四・八×全長二三八・三 一卷

今井似閑の遺言状。焦茶地に、唐草を織り出した金欄表紙。本文料紙は楮紙。巻首に「書置之事」と墨書。享保六年の九月八日の日付けがある。二四・八×二三八・三のものを表装し、二四・八×二九二・一の一巻としたもの。今

井似閑（明暦三十一六五七年～享保八一七三三年）は、近世初期の契沖門下の国学者で、和漢典籍の蒐書家として知られている。この一卷は、死去の二年前に書かれたもので、似閑六十五歳の時の手である。宛名は善四郎・お俊・太郎右衛門となっている。内容は、単なる遺産分配に関するのではなく、彼等の身の取置、等の些事に到るまで詳細に指示している。長兄・次兄の頃から傾きかけた家運を壮年期の精励によって挽回した似閑の大黒屋（京都代々の両替商）系家長・族長としての一面がうかがえる。この書置は、近世初中期の町人家訓書の系列に属し、細部まで配慮のとどいた記述にもかかわらず、蔵書等に関する記事は、ほとんどみえない。それは、この書置の日付け九月八日に先立つ七月二十日に、三手文庫を賀茂社に奉納している事と関わりがあった。ともあれ、命終の近きを覚悟し、文事、俗事にきまりをつけた死支度のあり方といえよう。似閑の蒐書は、現在、京都市賀茂神社三手文庫、山口県立図書館の二つに、ほぼ分蔵されている。平均的に良質なものが多く、その学者の眼力を偲ばせる。また校本の多い事も注目しておくべきであろう。山口に蒐書の半ばがあるのは、大黒屋が長州藩出入の御用達であったためと考えられる。（目録五より転載）

21 和国魂（享保二一一七三六一年序 写）縦二四・二×横一六・一 三冊

816

度会（久志本）常彰の著者自筆。茶色の濃淡二色の横刷毛目の紙表紙。後補になる。左肩に「和国魂（中冊は「魂」）上（中・下）巻」と打付書き。但、上冊には右肩に「久志本真蹟 常彰／自筆／稿本（「篁園文庫」の朱長方印）」と記す打曇りの入る白紙を貼る。袋で大和綴。料紙は楮紙で四周单边（一八・一×一三・四）に九行程に書く。各冊は上冊三三丁（うち二丁は白紙に記す）、中冊三四丁、下冊三六丁。印記は前記の他、表紙裏に「國民精神文化研究所」「翁墓書屋」の印、また上冊にのみ「古典甦蔵里」の緑陰刻印記、巻末に巖松堂の取扱印、等がある。序は「享保二十一年やよひ一日／度會常彰書于／小田原杉叢下」と閉じる。内容は、上巻「神道、神學、神代無文字……」他八

項、中巻は「神事元始、神嘗祭、幣木綿……」他二〇項、下巻は「大日本、大和、神代八數……」他一九項で、全五六項目からなる。朱墨の書入れ訂正などが多く、草稿の体である。度会常彰（延宝三十一六七五―年）宝暦二―一七五二（年）の著。本書の序文の文章は、ほとんどそのままに『日本国風』（次項）で用いられており、きわめて明確な国家意識の宣揚をみることができる。しかし、本書は単純に『日本国風』の準備稿ないし草稿本とはいえない。『国風』が日本百科の観があることに對して、本書は、問題を神道とその周辺に絞っている。その点、神道学者としての著者の思想は、本書に、より明瞭にみられるといえよう。

22 やまとくにがら 日本国風（延享五―一七四八―年序 写）縦二・二×横一六・五 六冊

81 27

度会（久志本）常彰の著者自筆。紙の粉色地に薄茶の横刷毛引の紙表紙。左肩に「日本国風 一（〜六）」と記す白紙題簽を貼る。但、第一冊には右肩に「久志本常彰自筆／名著日本国風 六冊（『篁園文庫』の朱長方印）」と記す打曇りの入る白紙を貼る。また、二冊目以下は各冊に「ハ／三番」と記す分類の白紙を貼る。印記は竹内篁園。同じく各冊表紙に「久志本」の朱長方印記もある。袋綴。料紙は楮紙。各冊は一冊五九丁、二冊五九丁、三冊六一丁、四冊七〇丁、五冊七五丁、六冊八〇丁。各冊一面九行、一行二三字程の字詰。印記は前記の他、表紙裏に「國民精神文化研究所」「翁墓書屋」、一丁表に「久志本」の朱方印、そして一冊末尾に巖松堂の取扱印、「古典甕蔵裏」の緑陰刻印記（一冊目のみ）等がある。序は「延享五年三月穀旦 度會常彰書」と閉じる。内容は、前項の自著『和国魂』を享け、巻一「神国、鰲馭廬島、大日本、倭、大和、敷嶋、食國、……」を始め、巻六「……立花、仙翁花、菊」に至るおよそ百四十項からなり、日本の古習俗、故事等の由来を求めたもので、世事習俗の百般にその目は及んでいる。引用書は古今にわたり、早い日本論ともいうべきもの。久志本（度会）常彰は、伊勢国豊受大神宮の禰宜で、神道学者。著述は極めて多い。

23

脚結<sup>あゆいへんれい</sup>変例

(安永元—一七七二—年—安永八—一七七九—年頃 写) 縦二二・六×横一五・三

81 22

富士谷成章の著者自筆。淡い焦茶色の紙表紙。左肩に「脚結變例」と打付書。袋綴。料紙は楮紙で十行の野紙（一八・二×一三・〇）である。墨付五〇丁。原則として一首を一行に書く。「國民精神文化研究所」等の印記、巻末には「月明莊」の朱方印記がある。表紙裏には「家集次第 三十六人 同補／入門式 名簿 年預名簿／出題 春秋夏冬／彦富 義胤 政要／清耕」等の門人名が記されている。備忘のメモでもあろう。内容は、勅撰集（本文に集付がある）を始めとする和歌の抜書きであり、それぞれ項目に区分されている。これは脚結（助詞の類）の用例を引いたもので、通常と異なる例の列举で、覚書きともいふべき未定の稿本である。著者、富士谷成章（<sup>シゲタヤ</sup>元文三—一七三八—年—安永八—一七七九—年）は、京都正新町北辺に住した。本居宣長と並称される人で、皆川春洞の第二子（兄に淇園あり）、一九才の時に富士谷家の養子となった人。『三十六家』上に「翁、人となり頓悟敏捷にして、人の跡をふまず。其詠歌に於ても、一家風をなせり。ことに言語、音便の説を精密になし、其法則を立て、後世の規範とす。大に古語を解き、古歌を訳するに益あり。鈴屋翁（宣長）も頗るこれを賞す。実に後進の功、すくなからず。人称して藤谷風といふ。其門に入り、其教を受けて、神の如く敬重するの士、甚夥し。近世平安の一大家といふべし。」という。本書はその代表的著作でもある『脚結抄』の変例を記したものであり、考察が脱稿後も続いたことを示している。

24 本居宣長書簡（自筆 写）縦一五・三×全長一四九・八 一卷

99 25

荒木田尚賢宛本居宣長書簡。金茶地に、鹿、猪、唐草を濃緑と金銀で織り出した絹地の表紙。本文料紙は楮紙。裏打ち表装を加えて、一七・九×一七九・七の一巻としたもの。本居宣長（享保一五—一七三〇—年—享和元—一八〇一年）が安永五—一七七六—年七月三日、伊勢内宮の神官荒木田尚賢に宛てて出した書簡である。その内容は、長文であり、「二宮神宝ノ図」「文徳実録脱簡ノ補」を宣長がみ、不審の個所を別紙に書きつけ返送した事、安芸国の重

加流神道家柄崎八百道が宣長を訪ね晤語したこと、春中に参宮を予定したが麻疹流行で沙汰止みになったこと、『古事記伝』六之巻が尚賢から返却され、八之巻を貸与したこと、「字音かなつかひ」を尚賢にみせたこと、また「利益ヲクホサト訓申候事」「景行ノ巻詰ニ於確ノ事」の古語考証、等からなっている。学問的内容に富み、宣長と尚賢の交渉を見る上にも注目すべきものである。なお尚賢は、同国津の神道家谷川士清の門に学び、その女婿となった人で、賀茂真淵の教えを受けたこともあり、宣長と親交があったが、この書簡執筆時は、まだ鈴屋に入門はしていない。入門は天明七―一七八七―年に至ってからである。本書簡の文字も典型的な宣長の字体で丁寧に記載されており、保存も良好である。釈文および内容考証は『国文学研究資料館紀要』第一号・昭和五十年三月に詳細である。（目録五より転載）

25 神祇秘抄・神皇系図・神皇実録（天明六―一七八六―年写）縦二七・三×横一九・九

819

稲葉通邦の写。鶯色地の紙表紙。左肩に「神祇秘抄／神皇系國／神皇実録」と打付書。袋綴。料紙は楮紙。表紙裏に「稲葉通邦自筆」と記す付簽を貼る。一九丁。一面一三行、一行二二字程。「國民精神文化研究所」「島田蔵書」等々の印記がある。末尾に本文末に「裏書 此奥書不至歴不居其職莫披見穴賢々々 在判」と記し、巻末に以下の一文が入る「右実録以上一卷之題云神祇秘抄也大須真福寺古写巻物也 六月十四日／伊勢大神宮之以下／右一卷題云御鎮座傳記也大須真福寺藏古写巻物也／天明六年十一月五日 越遠郎（通邦之印など二つ）／以上并黄紙／通邦私按此巻物有虫跡神皇系圖以下合一巻神祇秘抄者前巻也且其題云御鎮座傳記者一紙亦是前巻錯乱而在此也神皇実録之末闕者蓋不過一紙今題為傳記者即實録之末而已實録之初書<sup>（？）</sup>氏錄前巻者亦可證也」。稲葉通邦（延亨元―一七四四―年）享和元―一八〇一―年）は尾張藩士。武技・礼法を学び、律令の学に精しかったが、寛政元（一七八九）年には本居宣長に入門している。河村秀根と共に尾張敬公の編に成る『神祇宝典』『類聚六国史』の校合に従事したほか、大須真福寺

蔵の将門記（現国宝）を発見した人としても有名である。本書も真福寺所蔵の古巻を影写したものである。

26 古今要覧稿（天明六―一七八六―年頃 写）縦二七・六×横一九・八ないし二六・八×十八・五 六冊

ヤ 9 159

屋代弘賢の著者自筆。江戸時代の類書。純粋な草稿と浄写本との三種と判断される取り合わせの形であるから、それぞれに分けて記述する。

(1) 第一冊（1）。薄茶地に縦に刷毛目に入る紙表紙。縦二七・六×横一九・八。左肩に「古今要覧稿」右よりに「伎藝部／あして みづで うたゑ」と打付書。料紙は、楮紙、および楮紙に貼付（裏打ち）した鳥の子。袋綴。全十七丁、墨付十五丁。採色絵図入り。中程「葦手書考」の十丁（一面十行）を中心に前後に楮紙に貼付した資料の写しが入るといった体であり、多くの貼紙が施してある。印記は、狩野亨吉氏のもの、「芳宜園奇賞」（加藤千蔭）、杉園蔵（小杉楳邨）、「青谿書屋」（大島雅太郎）等があり、末尾に「月明荘」もある。「葦手書考」の末尾に識語がある。

それは「天明六年丙午五月下浣草之源詮賢識／寛政元年己酉六月下浣改正源弘賢識」である。巻首の大型の芦手絵（元輔集の表紙など）の模写が付綴されており、その端に「元文三年午三月岡本義悦摹／文化四年秋再摹」の記述があるのは弘賢の筆と認められる。よって、少なくともこの部分は、天明六年、寛政元―一七八九―年を経、文化四―一八〇七―年ごろまで補訂がつづけられたのであろう。すなわち、この冊は、純然たる草稿の姿を示し、特に芦手絵の考証に苦心したらしく、多年にわたる塗抹訂正がみられ、貼紙ともども追考の跡を伺える。

(2) 第二冊（2）～第五冊（5）。砥の粉色の紙表紙。縦二六・八×横一八・五。右肩に「歳時部 嘉定」（二冊）、「器財 度 ものさし」（三冊）、「器財部 量 ます」（四冊）、「器財部 權 波賀理」（五冊）と打付書きされる。

料紙は楮紙。袋綴。二冊目は墨付八丁。三冊目、墨付十丁半、絵の折込み三枚、貼紙一枚。四冊目、墨付四一丁、うち十一丁分が絵であり、絵の折込み六枚。五冊目、墨付一二丁、二丁分絵、絵の折込み一枚。各冊十一行を基準（多

くの割注が入る」とする。各冊巻頭に「古今要覽稿卷第 / 源弘賢著」とある。印記は一丁表に「さくのかま」の朱円崩し等がある。この各冊は、浄写本と考えられるものである。

(3) 第六冊(6)。紙の粉色地の紙表紙。縦二六・九×横一八・八。左肩に「古今要覽稿」、右肩に「器財部 鑑 あかとり 紅葉」と打付書。料紙は楮紙。袋綴。全八一丁(遊紙あり)。極彩色図一五枚、単彩図七枚が入る。十行程を基準(多くの割注あり)とする。内部は、「器財部 馬具/鑑三」とあるのが、二七丁。「あかとり」が、一七丁。

「草木部/紅葉/七」が三七丁。印記がある。特に巻末には「月明荘」の印記がある。

(1)(2)(3)ともに同筆であることは疑えないが、(3)は(2)に比し、筆の動きに雑な部分が認められる。古今要覽稿は、江戸時代の類書の雄であり、弘賢(宝暦八―一七五八年―天保一三―一八四一年)が、幕府の命により、その編纂の総判となり、一千巻を目標に、文政四―一八二一年から、弘賢の逝去する天保一三年までの二二年間に、凡そ五百六十巻を撰進したものである。猶、弘賢の自筆浄写本と思われる一七九冊が内閣文庫に現蔵される。

## 27 開国論(著者自筆稿本) 縦二三・〇×横一六・一

81 1

富士谷御杖の著者自筆。薄青色布目地の紙表紙。左肩に「開國論」と打付書。袋綴。料紙は楮紙で十行の野紙(一八・二×一三・二)。四三丁。一行二二字符。柱下部に「橘仙堂板」とある。「國民精神文化研究所」等の印記、また巻末に「月明荘」の朱方印記がある。内容は「開國論」三丁につづき「俳諧/如蓮華道人著」とあり、その末尾には「天尔波目錄/此部立はわか父成章のあらはせる脚結/抄にすかりたる也」と記される部分六丁。以下一五丁遊紙をはさみ一九丁まで例証。二〇丁から「てにをはの事」、二二丁から三二丁まで例句。ここに「月明荘」の印記あり。以下国語関係の例証等が記されるが、それは「十経本義」、「各義」、「経緯各義」、「経緯本義」、「経緯各義」、「十経本義」、「五十音各義」、「経緯各義」となっている。項目の重複や、後に例等の付加を考えてでもあろう余白が目

立つこと、また消墨、訂正などが散見し、草稿の姿を示している。開国論は、本居宣長と並ぶ江戸時代の国学者富士谷成章の子で、宣長を批判し、独自の言霊説により古典を解釈して『古事記燈』『万葉集燈』等を著わした富士谷御杖が、神典にもとづく処世の方途を論じた未定稿の自筆稿本。開国とは、神典の教に眼を開いて、「隠身かくりみ」の道理により世を処することであると御杖は説く。昭和十一年刊『富士谷御杖全集』第二巻に翻刻されたものの原本。また続く「俳諧」等の部分は、『脚結抄翼』等に結晶した国語に関わる資料で、その苦闘の姿を伝えるものであろう。

28 脚結抄翼あひしやうよく（寛政六—一七九四—年頃 写）縦二二・五×一五・八

81 32

富士谷御杖の著者自筆。薄茶地の紙表紙。左肩から「脚結翼草稿」と打付書。袋綴。料紙は楮紙で十行の罫紙（一八・七×一三・一）である。三十丁。一行に二行書き。「國民精神文化研究所」の中型印記等が巻頭部にあり、本文末尾に「月明莊」、巻末に「國民精神文化研究所志田印」が押されている。本文初めに「脚結抄翼第一／北邊二世富士谷成壽述」とあり、二八丁に「脚結抄翼第二／北邊二世富士谷成元述」と記し以下二丁程本文、そして十丁の遊紙がある。『脚結抄』は父の成章の名著で、書名は『脚結抄』の補翼の意を表す。脚結抄の巻一及び巻二の初め数条の注解の稿を一冊に綴じたもの。まず各条の脚結の意味・用法を概説し、次に『脚結抄』に掲げる例歌について、具体的にその意味を解説する。御杖二十七歳の寛政六（一七九四）年前後の稿と推定され、御杖の歌学説成立以前の脚結研究の一端を示すものとして、御杖の学説の展開を考察する上に、重要な意義をもつ。表紙には、「脚結翼草稿」と墨書するが、内題には「脚結抄翼」とあり、「北邊二世富士谷成壽述」の署名がある。第二巻は書きさしのままとなっており、未定稿である。昭和十五年刊『富士谷御杖集』第五巻所収。

29 神典挙要（文化一四—一八一七—年頃 写）縦二三・〇×横一六・三

81 10

富士谷御杖の著者自筆。薄茶地の紙表紙。題簽の類なし。袋綴。料紙は楮紙で十行の罫紙（一八・二×一三・〇）



である。四五丁。一行二二字程。「國民精神文化研究所」の中型印記等が巻頭に、巻末に「月明莊」の印記がある。巻頭に「神典挙要 中臣御杖著」とある、本文は三四丁、余紙が八丁程ある。富士谷御杖（明和五―一七六八―年）文政六―一八二三―年）は国語学者として著名な富士谷成章の子で、父の語学説を承け、家学を相承しつつ、伯父の儒学者皆川淇園きえんの学風の影響をも受けて独自の歌学説を形成した国学者であり、語学的研究をその学門の出発点とする。本書は、本居宣長の『古事記伝』に対抗して著した『古事記燈』の外篇ともいべき書の一つ。『古事記燈』の稿本中もつとも遅くになったと思われる『古事記燈神典』（文化十四―一八一七―年起筆）と同じく「中臣御杖著」と署名があるから、あるいはこれと前後しての成立であろうか。はじめに神典に示された神道の大意を概説し、以下古事記国生みの各条を挙げてその要旨を説く。未定の草稿本であるが、御杖晩年の作業として注目に値する。昭和十二年刊『富士谷御杖集』所収。

30 詩經集註（刊年不明）縦二七・九×横一六・五 八冊

ワ 4

鈴木朥書入。栗皮色（渋引）表紙。左肩に四周双辺で「詩經集註五（〜八）」、また朱、白等で「詩經集傳一（〜四）」と打付書。各冊、丁数は略す。本文は四周双辺縦一九・九×横一三・六で、無界野紙に九行、一七字詰め。頭部に四・一の欄外空白。ここに書入れが施されている。袋綴。料紙は楮紙。各冊巻頭に「真読書樓」の長方、「乾堂」（尾張の神学者で漢学に詳しかった河村益根―秀根の第二子―か）の朱円印記、がある。刊記「書林豊雪斎道伴刊」とある。朱または墨で木版本の句読・返り点・送仮名の改訂を施す外に、綿密な書入を施している。書入は複数と認められ、朥のものばかりでないが、各冊に「朥按」「朥曰」と記す部分は朥自身と認められ、「朥」の名を明記するものだけでも、巻一から、四、四、七、一、六、四、三、三、の三二個処にわたる。鈴木朥（明和二―一七六五―年）天保八―一八三七―年）は、本居学派の国語学者で、『言語四種論』『活語断続譜』等に卓抜な業績を挙げて国語学史を

飾る人である。だが本来は、宣長と「直毘靈」の古道論をめぐり論争した市川鶴鳴に学んだ古文辞学派の儒者であり、尾張藩に禄任して明倫堂の儒者を勤め、天保四年、七十歳ではじめて明倫堂教授となり、国学を講じるに至った人である。したがって、儒学者としても『大学参解』『論語参解』『四書雜錄』等多くの著述が知られるが、大部分は戦災の灰燼に帰し、胤の漢学者としての面目を窺うべき資料は、今日では極めて乏しく『離家学訓』『離家集初編』以外、具体的にその考説を窮うべき資料は極めて少ない。その意味で、この書入本は、胤の訓話の実際を見るべき資料として、貴重と言える。

31 文政大嘗会次第（文政三—一八二〇—年写）縦二七・二×横一八・三

81 14

山川正宣の著者自筆。茶色地の紙表紙。左肩に「文政大嘗會次第」と記す白紙の元題簽を改装後に貼付したものがあ。袋綴。料紙は楮紙。一六丁。一面一三行、二四字程。絵四図入り。一丁表に「文政大嘗會次第」とあり、「國民精神文化研究所」の印記がある。二丁表から本文「大嘗會國郡卜定事」以下が入り、同前記の中型印記等がある。

奥書があり「大嘗會次第第一巻以坊間流布本寫之而誤脱不少／也未必為善本耳／文政三年十月 山川正宣謹識」と記す。山川正宣（寛政二—一七九〇—年—文久三—一八六三—年）は、摂津国（大阪府）池田の人、代々の酒造家であったが、賀茂秀鷹に古典の学を学んだ。学風は着実で、考証に長じていて、『山陵考略』『姫島考』『山川正宣家集』等の著述がある。本書は、仁孝天皇の文政元年Ⅱ（文化一五・一八一八）に挙行された大嘗會の次第の忠実な記録。

32 後輔軒小録（天保四—一八三三—年写）縦二七・一×横一八・六

81 26

新庄道雄の著者自筆。厚手の無地表紙。右側から「三十二番（小書）／天保四年八月廿八日稿成／栢苑漫筆 一／後輔軒小録」と打付書。改装になる。袋綴。料紙は楮紙で十行の野紙（二三・四×一五・四）で、柱上部に「觀古堂」と刷られている。上部四・一程あき。これが、四十丁で、後部に別紙（二六・二×一七・七の無野の楮紙）で七

丁つづく。全四七丁。「國民精神文化研究所」、「二階廼屋藏書之印」(二階廼屋は道雄の家号)の印記がある。末尾に跋文があり「天保四年八月廿八日 栢苑主人後記」と結ぶ。序文は「四方ノ國人ノ話ヲ聞四方ノ國ニ遊ヒテ自ラ見聞セシ事ナトスキテ思ヒ出セハ多クハワスレヌルヲノミナリ一日書肆ニテ一冊子ヲミル伊藤氏ノ隨筆輜軒小録ト云此書ニアル目錄ノ事己モ自ラ聞易セシヲ多シ其目ヲ記シテ己カ聞見セシ事トモヲ集テ後日ノ茶話ノ助トナラントテカクナン 天保四年秋八月栢苑新庄道雄」とあり伊藤東涯の隨筆による題名と知られる。内容は、壺碑之事、草生水火井之事、塩井ノ事、以下三四項目、それに別紙の、先世銅錢之事、以下八項の四六項目からなる。新庄道雄(宝永五——七七六——年、明和四——一八三五年)は、駿河国府中の人で、平田篤胤門の逸材。栢園(苑)は号である。天保四年の稿として本書があるから、道雄、晩年五八歳の秋の作である。

33 加納諸平著書(天保一三——一八四二年写) 縦二四・四×横一六・六 四冊

ナ 6  
5

伴林光平写。考証。藍色地の紙表紙。左肩に、「神拝考 伴林光平自寫」(第一冊)、「斬髮考」(第二冊)、「二世竹 竹取物語考」(第三冊)、「額田王考/免寸河考」(第四冊)と記す白紙題簽を貼る。第一冊一丁表に「神拝考立花之卷/斬髮考/額田王考/二世竹 竹取物語考/神拝考附録数十箇条/免寸河考」と記されてい、四冊末尾に奥書(識語)を有するので、一括して扱われていたものである事は明らかである。当然、表紙は後補になる。袋綴。料紙は楮紙。第一冊墨付十三丁。二冊、同二五丁半。三冊二三丁半。四冊一七丁。各冊一面十二行。三八字程。印記は各冊とも「國民精神文化研究所圖書印」等がある。以下、各冊ごとに記述する。第一冊、前述の(目錄)につづき「神拝考/立花 菅原諸平謹記」と巻頭に記し「ことにいてゝいへはこやあしとかいへるを」から本文が始まり「あなかしこ」と閉られ、ついで「天保十三年<sup>年</sup>四月六日」と書写年月が記され、その後「。坐摩卷。筑紫卷。加志理ノ卷。神拝考附録」と記す。第二冊、巻頭「△斬髮考 四月十一日稿成」とあり、。ふりわけ髪。うなる。はなり

の髪 と各々髪についての考証がつづく。また八丁表からは「物恋之伎 稲負鳥」「階香鳥 猪名野」「雛羅 長髓彦」「大枝 雄々之伎」等、歌語や固有名称に対する考証がその内容となる。第三冊、巻頭「不多与陀氣 菅原諸平記」と記し「総論」について「考証」が入る。いわゆる『竹取物語考』（『国文学註釈叢書』五所収）である。あるいは『国書総目録』に所載の「布たよ竹 一冊 和文」とある高山香木（稿本）〔高山郷土館〕本も竹取物語考であろうか。末尾には「。五月忌の説」の考証が付載されている。第四冊、「額田鏡王考 紀伊 菅原諸平稿」と始め、額田王（又は名鏡王）に関して歌を中心に考証する。猶、これは、『嚶曰筆話』第二篇・天保十三年九月刊に収録されている。次に古事記高津宮段の「免寸河」に関する考察が二丁程入り、「己上柿園大人考／伴林光平記」と閉じ、次に「。すみれは今のげさげ花也いへる弁」「。依綱池」の考証。十六丁裏には「此一巻者深故事亦多則妄ニ為同輔田深教示有而後／与閉玉有者則凡秘ニ他見ニ子有孫有後ニ見時假初ノ文字之上／之考書ト齊並ニ勿ニ思悞ニ／天保十三壬寅四月廿四日ヨリ五月十八日迄任師教写之／伴林光平 謹書」との識語が入る。そして巻末に楮紙を貼り、伝来を記す朱筆等がある。それは「コレハ佐々木春夫主ヨリ所贈ノ陈書即柿園翁ノ説ヲ伴林光平翁が筆記セラレタル自筆ノものなり御一覽……」とする。伴林光平の自筆であることは、『国文学研究資料館特別展示目録 五』の12『覚了法師集』と同筆であることからもしれる。光平は前述の一文に譲るが、諸平に師事した人であつた。加納諸平（文化三一八〇六―年／安政四―一八五七―年）は、遠江国浜名郡白須賀に、夏目鸕鷹の子として生まれ、後、和歌山で加納伊竹の嗣子となり、同藩に国学所を設き教授となった人である。『曾丹集摘草』等が知られている。なお、『竹取物語考』以外は『国書総目録』にその項目を見出しえないが、辛して明治写になる大東急記念文庫の『山多豆考』に「免寸河考等を付す」の記載をみる。諸平の著書は、佐々木春夫家に多くが預けられていたが、佐々木家の火災などによってであろうか佚亡したものが多い（『加納諸平の研究』山本嘉将、昭36を参照）。よつてその一部を知る、又

は、光平と諸平の関わりを現にみる上でも、貴重なるものであろうか。

34 晃山扈從私記こうざんこしよしき（天保一四—一八四三年写）縦二三・三×横一六・三

81 12

成島司直もとなおの著者自筆。砥の粉色地に薄茶の横刷毛引、金砂散らしの紙表紙。左肩に四周双边に「晃山扈從私記」と記す白紙の題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。四五丁。巻頭二丁に極彩色で日光の景を描く。一面十行、一行二六字程。和歌一首一行、漢詩二行書き。「國民精神文化研究所」「鵜飼藏書」の印記がある。内題「露の道芝」一九丁、「神わざ」二二丁、の二部分よりなる。序の末に「書之時天保十四年六月十七日也 大學頭 林訥撰」とあり、末尾は「是歲五月菖蒲ふく軒の雫を硯にうかへて 從五位下圖書頭 源朝臣司直しるす」と閉じる。著者の成島司直（安永七—一七七八年—文久二—一八六二年）は、代々の幕臣、儒者の家に生まれ、和漢の典籍に通じ、將軍家慶の寵遇を受け、しきりに榮達、諸大夫図書頭となった。文化六—一八〇九年『御実記』（徳川実記）の編纂を命じられ、司直の家をその事業所とし、よく努めて嘉永二—一八四九年に成立した。林述斎（漢学者。序者の林訥は林衡とすれば、述斎）はその総裁であった。本書は天保一四年、將軍家慶の日光参拝の供奉記録であり、達意の和文で綴られている。

35 歷朝神異例（天保一四—一八四三年序 写）縦二六・三×横一九・〇 七冊

81 11

橘守部の著者自筆。砥の粉色地に上部は薄茶の横刷毛引、下部は金砂散らしの紙表紙。左肩に黄色地の紙に「神異例 稿 一（く七）」と記す題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。各冊は第一冊六五丁、二冊五〇丁、三冊三九丁、四冊四九丁、五冊四二丁、六冊四五丁、七冊三七丁からなる。各冊一面十行、一二字程。「國民精神文化研究所」、「椎本文庫」（守部の文庫。五冊の表紙題簽にもあり）等の印記がある。なお、第一冊にある序の部分一丁半は、本文に別に記した紙を貼付したものであり、これの末尾には「天保十四年七月」と記す。浄写の自筆稿本であるが、若干の

朱による補訂がみられる。内容は、卷一、天照大御神ノ靈異、卷二、内侍所ノ神鏡ノ靈異、卷三、熱田ノ大御神ノ靈異、八坂瓊ノ曲玉ノ靈異、卷四、天皇皇祖神ノ靈異、八幡大神ノ靈異、卷五、罰夷賊ノ神ノ靈異、卷六、修理国土ノ神ノ靈異、臨事護助神ノ靈異、卷七、諸神ノ雜ノ靈異、崇咎諸神ノ靈異、念野諸ノ靈異、からなる。古来の神々の靈威を諸書から抜粹し、前述のように類別して、靈異についての見解を記したもので、守部の神秘觀を見ることができ。橘守部（天明元―一七八一年―嘉永二―一八四九―年）は伊勢国に生れ、十七歳で江戸に出、ほとんど独学で一家を成した特異な国学者で、本居宣長の説に対抗した人。本書は大正十年刊『橘守部全集』第六卷所収。

36 旧事記直日<sup>くじきなおひ</sup>（弘化四―一八四七―年序 写）縦二六・六×横一八・六 六冊

81 18

橘守部の著者自筆。藍色地の紙表紙。左肩に白紙に「舊事記直日 一（一六）」と記す題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。各冊は一冊序十五丁、本文五一丁の全六六丁、二冊四六丁、三冊七〇丁、四冊四六丁、五冊六三丁、六冊四五丁。本文八行（一冊目の序は八行）。一行一六字詰。「椎本文庫」（守部の文庫）、国民精神文化研究所の登録印等の印記がある。序の末は「弘化の四とせう月のはつかの日 橘守部」と記す。著者自筆の清書本。聖徳太子の撰と伝える旧事記（先代旧事本紀）が平安朝の偽撰であることは、江戸時代すでに明らかにされたところで、今日の常識であるが、守部は本書の原形は奈良朝末に、神祇にあずかる何人かが諸家の古記録の残篇を集録したもので、それを平安朝に補綴し、聖徳太子撰の旧事本紀と誇称するに至ったものが現存流布の本であるとし、流布本の本文を篩<sup>ふる</sup>い分けて、奈良朝撰の原本を復元しようと試みたもので、ここにも旧事記の偽書であることを力説した本居宣長への対抗意識が窺われる。苦心の作ながら、成功とはいい難かるう。

37 〔雑著〕（天保―一八三〇―一八四四―頃 写）縦二三・五×一七・一

81 2

五十嵐篤好の著者自筆。朱色地に雷格子に藤丸文散らしの空押しをする紙表紙。左肩に四周双边の白紙に「五十嵐

篤雑好著」と書く貼題箋。右より中央上部に、四周单边で、右から横書で「杜鵑花園叢書／第廿八集／至卅七集」と記す横長の白紙を貼る。袋綴。料紙は楮紙。一二六丁。「國民精神文化研究所」等の印記の他、「巖松堂古典部／波多埜扱(?)書」を巻頭に、又「珍／杜鵑花／園文庫」の朱長方印が各作の初めにある中途に二ヶ所程「藤蔵書」の印記。内容は以下のとおり。「中沢道話書聞」(卯九月とある分が三丁、九月廿日日省斎とある分七丁、十行書)、「村木治好之文」(一四丁、一一行書)、「辞乃玉緒拔書」(一八丁、一一行書)、「無衣齒」(四丁、十行書)、「歌占考」(七丁)、「續言葉直道」(五丁、ただし二丁分につづき「續詞直道 白雅亭篤善著」とある再稿部分が三丁)、「西籍慨論をよむ」(八丁、一二行書)、「神詠古義を讀」(六丁分に墨消し等のある草稿部分八丁)、「隙行駒」(五丁、草稿の体)、「天保五甲午雜記」(一七丁、草稿の体)。五十嵐篤好(寛政五—一七九三年—文久元—一八六一一年)は、越中礪波郡内島村の人で、文政二—一八一一年、事に座し能登島に流され謫居中に契沖の詠にふれ、大いに感奮し赦免の後、本居太平に歌を学び、三十歳で富士谷御杖の門に入り国学を学ぶ。師の言靈説を承けて地方の国学者として重きをなした。また安政五—一八五八年に豊後の千住弘太夫が越中に入るのを知り、その農事に精しいを以て、留めて彼の説を聞いた。しかし、それが藩庁にしられ流浪人を宿泊させた科により一年の閉門を命じられたり、波乱ふくみの生涯を金沢に閉じた。『湯津爪櫛』『伊勢物語披雲』『蜻蛉日記解環旅寝』『富士谷御杖歌集』など著述も多いが、農政に関するものも少なくない。表紙にある「杜鵑花園」は、臥牛斎、雉岡、等とともに篤好の号である。本書の細目は前記したが、雜録を集めたと総合的に言えるが、「歌占考」等の自らの執筆にかかるものの他、「詞の玉緒」「鈴屋集」等の抄録にかかるものも多い。

38 名言結本末なこむすびのもとすえ(弘化三—一八四六年頃 写) 縦二三・六×横一七・三

五十嵐篤好、鎌田昌言の著者自筆。黄色地に菊唐草の空押しのある紙表紙。左肩に四周双辺の白紙に「五十嵐篤好

著（小書）／鎌田昌言評（小書）／名言結本末稿本 全」と記す題簽を貼る。また右よりの中央上部に「杜鵑花園叢書／第一一六集」と横書きの紙を貼る。袋綴。料紙は楮紙。緒言、序各一丁、本文一四丁の全一六丁。六枚程の朱の付簽を貼る。「國民精神文化研究所」、巖松堂の取扱印、等の印記がある。本文末尾に「天保十一年二月」の日付がある。なお、序にあたる部分は「此一冊は小生思ひ付たる事共其時々書つきたるにも校正も不仕事所……」と始め、「五十嵐篤好／丙午四月日／鎌田様」と記す。丙午は弘化三―一八四六年であり、天保十一年に記し送ったものに、鎌田昌言の評を貼り付け、六年後の弘化三年にまとめたものと考えてよからうか。内容等は、末尾に記された「準夫」なる人の識語に要を得ている。それは「此書ははしに記せる文にも見ゆることく五十嵐篤好翁が其友鎌田昌言に送りて批評を乞ひたる翁の文法論にて固より翁と昌言氏との自筆本文は翁朱は昌言氏なり此書の清写せる者は先生翁の遺書の世にちりばひ出てし折り帝国大学の図書館へ収められたり当時余が手に入らざりしをいとく口惜しく思ひ居たりしに今此稿本を得たりしは却りて大なる幸になむ 丙午三月盡日 準夫記す」である。文中の図書館本は現在所在が不明だが、写しは他に富山県立図書館、戸出町立図書館にそれぞれ一本を蔵する。内容は、文法論とある如く、「聞く」と「聞かす」、「遊ぶ」と「遊び」、「めづる」と「めづらし」など、語原を同じくする語の本末（親子関係）を論じたものである。

39 以呂波正義伝（安政三―一八五六―年写）縦二七・六×横一九・八

五十嵐篤好の著者自筆。薄茶地の紙表紙。左肩に「以呂波正義傳」と記す白紙題簽を貼る。袋綴。料紙は楮紙。一面八行、一行一八字程。「國民精神文化研究所」の大型印記、等、また巻頭に、同前の中型印記、巖松堂の扱印、等がある。巻末に「安政三丙辰年／九月吉日／五十嵐孫作／篤好（花押）印／牧田重兵衛殿」とある。内容は巻頭から「以呂波正義伝」八丁、「書法規矩」一三丁の二つからなっている。浄写本であり、前の作には朱でカタカナが漢字



のどの部分かを示したり、後者では字形のバランスを朱で記したり等、朱を自在に用いている。前者「以呂波正義伝」は、大和がな（片仮名）の字母についての従来の謬説を批判し、すべて字音に基くものであることを証して、正しい字母を示す。後者「書法規矩」は、筆法についての諸説を載せた書道（入木道）論書である。牧田なる人に与えたものであろうが、大柄な字体の典雅な書である。

40 倭姫命世記考證（嘉永元—一八四八年写）縦二七・七×横一九・四

谷森善臣写。紙の粉色の布目地に茶の横刷毛模様を入れる紙表紙。左肩に「倭姫命世記考證 全」と打付書。袋綴。

料紙は楮紙。一二七丁。一面九行。一行二〇字程。頭部に五・五程の余白があり、そこに書入れがあり、他に数葉の付箋がある。「國民精神文化研究所」等の印記がある。奥書は最終丁表に「以上文化庚午年十二月廿六日黄昏ニ書畢リヌナホ暇イルヘキコトナレハ此後ヒマアラムトキツギノニ改メ正シナホ考ヘテ解ヘキヲ怠アラハ此マニスツヘキナリ 於平安堀川（内をミセケチにして）官宅 信友（花押）」また「此後ウチオキテ今ミルニワロキコトモアマタアリ又ステンモヲシキコムチスヨリノ比考ノ内ヲトリワキテ書オカマホシクハオモウ也 天保十四年四月十二日 書 信（花押）」とある。裏には「伴老人自筆ノ草稿ヲ借得テ寫ヌイマノヒマニオノカ考フヲモツキノ書加ヘテムトス 嘉永元<sub>戊申</sub>年十一月卅日夜書ヲヘヌ 種案（花押）」とあり、次に紺青で「上田百樹ノ世記考ノ稿本ノ説ドモヲ萌黄（「紺青」と傍書）モテ書入オキヌ本文モ校合セツ タネ松」と記す。最後に朱で「見得タルマニ思得タルマニニ緒モテ書イレオキツカクシツモモノシモテユカハイサニカ後ノ考ノタスケトモナリヌヘカラムトテソ 嘉永五年冬十二月廿三日附（右傍に「就」<sup>？</sup>谷森氏木簀材 矢野玄（花押）」とある。奥書中に「タネ松ニ種松」とあるのは、谷森善臣（生年不詳、明治四四—一九一一年）である。善臣は、京師の人、初め松彦といい、弘化元—一八四四年に種松と改め、後に善臣と称した。伴信友の門に入り国学を学び、和歌をよくしたが、皇陵の荒廃を嘆き大和、河内

などの陵墓を探索、その筋での効を發揮した。後、創設された学習院の教授。信友の門の善臣による神道五部書の一つの考証の写しであるが、本文中に、紺青、朱によつての校訂、注記が施されているのは前引の奥書に応じている。末尾の「矢野玄」は未勘。猶、書名は『倭姫命世記考』もしくは『倭姫命世記古文考証』を取るのが一般のようである。

41 篤能玉籤すいのたまぐし（安政二―一八五五年刊本の原本）縦二六・五×横二〇・一 二冊

81 5

六人部むとべ是香よしかの著者自筆。厚手の楮紙表紙。中央に「篤能玉籤すいのたまぐし 上（下）」と中央に打付書き。袋の大和綴じを包背装。装訂の継ぎ目に「大坂（横書き）書林／行司」の墨印が数ヶ所に押されている。上冊四六丁、下冊四二丁。一面十行。一行二四字詰。頭部五・五程余白あり。「國民精神文化研究所」の印記がある。浄写のいわゆる版下本である。書名は序文の末尾に「いにしへも道ゆきぶりにたむけはや／五百川野篤すく乃八十のたまぐし／六人部是香」とあるのによる。巻末に「萬延元申年四月 城州向明神神主 輯者蔵板主 六人部美濃守」また「浄覚町売弘人 加賀屋善蔵」と記す。内容は上巻「学文、古道、菅家遺誠、国学、言靈」下巻「荒玉、ぬば玉、たまきはる、ちゝの實、湯津楓ユツカツラ、髻華ウズ」よりなる考証（随筆）である。六人部是香（文化三―一八〇六年）文久三―一八六三年）は山城国乙訓郡向明神社の神官で、父と共に平田篤胤に学び、関西に於ける平田派神道の棟梁と称せられた人。歌格の研究にすぐれ、『長歌玉琴』の著者として有名。

42 直毘靈補注なおびのみたまほちゆう（安政二―一八五五年跋 写）縦二二・四×横一五・二 三冊

81 4

鈴鹿通幸の写。淡鶯色の布目地に小菊の空押しのある紙表紙。左肩に「直日靈補注上（中下）」とある刷り題簽（但、巻表示だけ墨書）を貼る。袋綴。料紙は楮紙。四周单边（一六・五×一二・一）で、柱に「直日靈補注」と刷る。上冊、序二丁、本文四三丁、跋一丁の全四六丁、中冊は序二丁、本文五〇丁、跋一丁の全五三丁、下冊は序二

丁、本文五九丁、跋一丁の全六二丁。一面八行、一行二三字程。「東播加東／市場南近／藤氏之藏」と記す円に飾りのある印記、「國民精神文化研究所」等の印記、序の部分に、校本印とする神代文字様の印記があり、跋には「たかまさ」の朱方印もある。本文始めに「本文自注 本居宣長／補注 野之口隆正」とあり、跋に「直日靈補注上（中・下）卷令門人鈴廉通幸書寫一校之／安政二年 野之口隆正（印記）」とある。下巻末には、「わが日本国の聖人といふべき人は本居の翁になんありける、安政二年といふとしのさつき五日の日 野之口隆正かしこみ／もしるす」と記している。朱でまゝ削除訂正がみられるが、浄写本であり、梓行を予定してのもあつたかと推測される。伝本は、写本でのみ伝わり、静嘉堂文庫には稿本があるが、弟子の鈴鹿通幸（伝記等不詳）に清書させ、隆正の朱が入ったものかと思われ、定稿として前記伝本ともども貴重なものであろう。本書は、野々口隆正（寛政四——一七九二——年／明治四——一八七〇——年）が、宣長の『直日靈』に補注を加えたものである。隆正は江戸桜田の津和野藩邸に生まれた。『兼好法師伝記考証』や『在五日将中記復古解』など古典文学、『神代校異伝講義』など神道に関わるもの、語学など著作が多い。

43 出雲国造神賀詞文義考<sup>いつものくのみやつこかむよとふんぎこう</sup>（明治十一年——一八七七年写）縦二四・五×横一七・五

81 15

堀秀成の著者自筆。青色地に雲霞紋の空押しをする紙表紙。左肩に双边の白紙に「出雲国造神賀詞文義考」と記す。袋綴。料紙は薄様。序三丁、簽例三丁、本文二六丁の全三二丁。本文一面十行書き。一行二四字程。「國民精神文化研究所」等の印記がある。序は「明治十一年九月二日 堀秀成」と閉じ、本文末尾は「明治十一年八月二十八日起業同九月三日卒業／同日五日一校畢」と記す。句点などの他、朱による文格の指示などがあり浄写本であり、一ヶ所頭書もみられる。巻末には「拙著中文格類」として、「大秋詞文義考、神賀詞文義考、古今集序文義考、文範、古文語脉考、古文私撰、文範自註、文義考第一、同第二、同三」と記す。本書は延喜式所収の「出雲国造神賀詞」を古

代無類の名文として、その文章の格を分析解明したものが、多くの類似の仕事の一つであった。堀秀成（文政二―一八一九―年）明治二二―一八八七―年）は江戸の人。若くして国学に志し、本居春庭門下の俊秀富樫広蔭の門に学んだ。維新後は大教宣布に尽し、教導職中の衆望を荷った。落合直文の師でもある。

44 角組葦（明治二四―一八九一―年写）縦二三・六×横一六・三 六冊

吉岡徳明の著者自筆。焦茶色の紙表紙。左肩に白紙の題簽があり「建國第一編 建國之說難／角組葦／一卷」「角組葦／建國第二編 建國說序論」「角組葦建國第三編／建國說例言」次の三冊は「角組葦建國第四（五、六）篇／建國說之上（中・下）」と記す。袋綴。料紙は楮紙。各冊は、墨付一冊三五丁、二冊五丁、三冊六丁、四冊一八丁、五冊一三丁、六冊九丁よりなる。また一冊目を除き巻頭に紅梅色紙に、書名等（ほぼ目録と同じ各巻別の内容の記載）を記す。頭部を四・八程あげ、本文は一面二行、一行二五字詰。「國民精神文化研究所」等の印記がある。第一冊は、序、目録があり、次に紅梅色紙が入り「建國第一篇／建國之說難 吉岡徳明講演」と記す。前述の序は「つくむあしのはしかき」とあり「明治二十四年辛卯のとし一月五日新なるとしの始めの遊びにかへて 蘆廼屋徳明しるす」と閉じる。目録は、その内容を摘記するので以下に記す。「目録／建國六編／第一建國之說難（以下二行書き）皇國の建國說へ大難問題／なることを辯ず／第二建國說序論 皇國學術の秘蘊を論ず（本文冒頭には「皇朝建國の原理原則を解了すへき學術方法の大意を論ず」とある）／第三建國說例言 學術の要領史學の要決を示す／第四建國說之上（以下二行書き）天地開闢より三貴子／御國寄しに終る／第五建國說之中（以下二行）天孫降臨より神世の／三代にをはる／第六建國說之下 神武天皇大和遷都 即位紀元」がそれである。吉岡徳明（文政二―一八二九―年）明治四二―一九〇九―年）は江戸の人。平田篤胤の著書を読んで天台宗の僧籍を脱し、平田派の国学者として一家を成した。明治維新後は太政官御用係を勤めた。その著『古事記伝略』は名著として名高い。本書は徳明みづからの

選集で、明治二二年の皇典講究所講演の筆記（第一冊）など、日本の建国を古典によって論じ、国学の立場を説いた論説を収めた。題名は古事記の創世神話による。

45 賀茂真淵書簡（自筆 写）縦一七・八×全長五〇・三 一軸

99 26

市左衛門宛賀茂真淵書簡。一七・三×五〇・三の楮紙を黄色地の紙に貼り表装し、七七・二×六六・一の一軸としたもの。賀茂真淵（元禄十一一六九七―年）明和六一一七六九―年）から真淵の実子で、浜松宿の脇本陣梅谷家を継いだ市左衛門真滋にあてた書簡である。年代未詳。親族の安否や自分の健康のことを記し、歳暮の心配りなどをこまごまと書き、肉親へのこまやかな情があふれていて、真淵の私生活の一端に触れることができる。文中の「小次郎様」とは田安宗武の世子。「御用甚重り」というのも田安家御用のことであろう。宝暦十三年正月十七日付書簡と内容が似ている。内容から、田安家出仕間もないころと思われる。釈文は左の如くである。

尚々五社へ祝儀之書状遣候。治兵衛へ印状も遣候。いば次郎兵衛へも遣候。脇さたにるる聞は神田門之外のはかし不申候。いまた何処ともしれ不申候。こまり申候。以上。一炭大分入申候にあしく候てこまり申候。可成事に候は、冬中二又へ御申おき春早々下り候様にも頼入候。以上。春と申ては来春の用には立申まじく候。味そを御くだし候のよし悦申候。はやく来れかしと存候。以上。押つめ候は、三方も遣し可申候へども此節はいまだより無之弥如此に候まゝ御身遣候。嚙々当暮心遣察入きのどくに候へども無是非候。以上。

当月十一日出之御状相届弥御無事厳寒被凌力千代も致成長候由大慶に候。お磯正月臨月之由候。其間折節悪候由。最前も懐胎之間時患被申候由覚申候。左候は、却而安産と存候。足袋二足御越候。よく御礼頼入候。我等も秋中痰気には候へども惣躰は随分達者にて顔色等当年はいかふ丈夫にみえ候由人々申候而一日も臥候ほどの事は無之候。併当夏以来御用甚重り日夜に宿に而も考物等いたし一円無寸暇候而日々之様に存候へば書状不遣候。最前之御状も

相届致承知候。一此間御納戸払少々拝領仕候。又 小次郎様之御召ふるしも一つ被下候間力千代へ遣候。冥加之為  
いたゞかせ候而正月御きせ可有之候。飛脚便に而此度遣候。 衛士

市左衛門殿

(目録五より転載)

。特別展示目録五補訂

16 連歌比況集

1、「……小田原妙覚（光の誤写か）……」とある「（光の誤写か）」を、湯之上早苗氏（連歌資料16・48の訂正）はほぼ氏の教示によると、京都大学平松本も「覚」であるとのことなので、削除する。

2、「公方様江追而被申……」の「追而」を「進上」と訂正。

3、「書写年の判る最古のものとみられる。」を末尾に補う。

34 ひおけのさうし

項の五行目『未刊中世小説』を『未刊中世小説』に訂正。

38 幸若舞歌謡集

二六頁最初に「列帖装。料紙は鳥の子。」を入れる。

44 北山抄

項の三行目「安藤北叟」を「内藤耻叟」に訂正。

48 宗祇連歌

項の二行目「全五九韻からなる」以下、五行目「……可能性がないわけではない。」の部分削除。次の文に入れ替える。

付句三十句（前句ともに六十句）をならべて写したものの。末尾は「財部殿進上」と読めそうで、財部氏に与えたものとみられる。署名は宗祇（字体、花押も宗祇のものに似る。この似すぎが逆に偽作を疑わせるとの見方もある。）で、自筆の可能性は高い。

国文学研究資料館特別展示目録 六

―国学者自筆本と新収資料を中心として―

昭和五六年一月一二日 発行

編集 国文学研究資料館参考室  
発行 国文学研究資料館  
〒142 東京都品川区豊町一―一六―一〇

国文学研究資料館

88.165

図書 (消)